

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァダ山脈における

国立公園の形成、一八八九〜一九一三

加藤 鉄 三

はじめに

一九世紀後半のアメリカ合衆国では、天然資源の濫開発に対する知識人の憂慮から、「自然保護」の気運が高揚し、やがてこの動きが二〇世紀初頭の革新主義期に「資源保全」政策の推進と国立公園の設立を促した¹⁾。

こうした「常識的理解」は、ヨセミテ国立公園(Yosemite National Park)の設立に深く関わったジョン・ミューア(John Muir, 一八三八〜一九一四年)を国立公園運動の立て役者と位置付ける一方、「自然保護運動の内」に「保存(preservation)」と「保全(conservation)」という対立する資源管理哲学を識別してきた²⁾。しかし、合衆国の従来の理解は「森の聖者」で「保存」派の中心ミューアの言説を表面的になぞるのみで、国立公園を巡る複雑な力学には目を塞ぎ、自然発生論的・単線論的な国立公園成立譚と年代記を描き続けてきた

と言³⁾える。我が国における認識は現在もこの段階を脱け出していない感が強い。

しかし近年の合衆国では、以上のような閉塞的研究状況を打破すべく、環境史家A・ランテによる国立公園設立・存続を巡る文化的・社会経済的背景(「記念碑的景観主義」モニュメンタリズム)と採取産業にとつての利用価値の関係)への注目が、力説されている⁴⁾。現在では、国立公園の現場における環境管理の変遷や景観変容への着目を始め、陸軍騎兵隊・鉄道会社・先住民など国立公園を巡る多様な諸勢力の関係もかなり明らかにされてきている⁵⁾。

本稿は、こうした複合的な視角・力学への着目の必要性をランテらの環境史研究から学ぶと同時に、ミューアの言説とこの時期の現場の担い手たる陸軍騎兵隊の動向の関連を可能な限り実証的に明らかにすることを目指す。別言すれば本稿は、環境史・西部史・社会経済史を架橋すること

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

で、カリフォルニア州シエラ・ネヴァダ山脈(Sierra Nevada Mountains)における国立公園の形成過程を構造的に解明する準備作業の一環である。

一、カリフォルニア州における「自然保護」の黎明、

一八五一〜一八八八

一八四九年にシエラ・ネヴァダ山脈北部山麓で起こったゴールドラッシュの波は同年中にシエラ中央部に及び、その中で二つの「自然の奇観」が「発見」された。同地域の先住民南部シエラ・ミールウオク系のアワネチ(Awaneche)の拠点アワーニー、後のヨセミテ渓谷(Yosemite Valley)と、ジャイアント・セコイア(Giant Sequoia。以下、セコイアと略記)である。

前者はアワネチによる交易ポストの襲撃に対して、一八五一年三月に追討部隊が派遣された結果「発見」され、一参加者によってヨセミテと命名された。後者は一八五二年にキヤラヴェラスの森が、五六年にマリボサの森が「発見」され、共にカリフォルニア中に知れ渡った。ヨセミテには一八五五年に最初の旅行者の団が訪れ、一八六〇年代前半までに観光開発の足音が迫った。セコイアは一八五〇年代前半に展示用に切り倒され、東部やヨーロッパに運ばれ

た。

セコイアの展示用伐採に対する批判はほぼ同時に上がっていたものの、五〇年代には対策は講じられなかった。市民が濫開発を憂慮し「自然保護」区設立を打診したのは、知られている限り、一八六四年二月下旬のことである。それを受けたジョン・コネス上院議員(カリフォルニア選出)によって「ヨセミテ州立公園法案」が提出され、同法案は同年六月末日に成立し、ヨセミテ渓谷とマリボサの森からなるヨセミテ「州立公園」が設立されることになった。⁸⁾

翌年、造園家フレデリック・ロー・オルムステッドが、州知事の依頼を受けて渓谷内での移動の制限や自然植生の「保全」などを旨とする報告書を作成したものの、当時は日の目を見ることなく終わった。六六年以降、カリフォルニア州のヨセミテ州立公園管理委員会(The Commissioners to Manage the Yosemite Valley and the Mariposa Big Tree Grove。以下、「ヨセミテ委員会」と略記)と地元経済界が観光開発を推し進め、絵画・写真とジャーナリズムによってその「崇高な景観」が宣伝された結果、旅行者数は着実に増加した。しかし、渓谷内には荷物輸送目的の家畜が放たれて植生を荒らしていた。

しかもヨセミテ「州立公園」は「モニユメンタリズム」に基づく小規模なものであり、シエラ中・南部のそれ以外

の土地は羊の移牧や森林伐採に晒され続けた。¹⁴⁾

他方、アワネチは一八五〇年代前半の混乱の中で首長テナヤ (Tanaya) を失い、集団としてのアイデンティティを失ったものの、隣接地域に居住していたモナツシユと共にアワーニーを利用し続けていた。¹⁵⁾

一八六九年以降、ヨセミテ溪谷を中心にシエラ・ネヴァダ山脈に深く関わっていくのがジョン・ミューアである。彼は一八七〇年代前半に同山脈の探索を通して「自然」認識を深め、ヨセミテ溪谷の地質学的起源と残存氷河の有無をめぐる「氷河論争」を通して名前を知られ始めた。¹⁶⁾

と同時にミューアは同州の雑誌や新聞に多数の記事を投稿し、同州内の山岳地域の「自然」と現状の紹介に務めた。そして一八七六年二月に州都サクラメントの『レコード・ユニオン (Record Union)』紙に掲載された記事「主の最初の聖堂」において、「自然保護」に向けた第一歩を印した。この記事の中で伐採業者と羊飼いに由る火災がシエラ南部の森に甚大な被害をもたらしており、森林を火災から保護する必要があると論じ、「綿密な調査」の実施を求めた。¹⁷⁾

行動を求めた点でそれ以前よりも一歩踏み込んでいたとは言え、「わが国の緩やかに結び合わされた政府がその問題について何かができるかやる意思があるかはあとになってみないとわからない」と述べており、連邦政府に対する信

頼を表明していないことは注意を要する。この文章から読み取れるのは、一八七二年三月成立のイエローストーン国立公園設立法が意識化されていなかったことである。ミューアは一八七五年の冬にオークランドに降りており、七六年時点までに知っていた可能性はある。ただし、この時期のミューアはシエラ・ネヴァダ山脈の調査に明け暮れており、特別な注意を払っていなかった可能性も高い。¹⁸⁾

また、環境思想上の重要性とは別に、設立当初のイエローストーン公園には予算が付かず、監視体制も不十分であり、名目的な存在にとどまっていた。それ故、七〇年代中頃までの連邦政府に多くを期待することはできなかったであろう。¹⁹⁾

そして、ミューアがシエラ中・南部を逍遙していた七〇年代前半はカリフォルニアの牧羊業の最盛期であったことを見落としてはならない。²⁰⁾

ところで、ミューアの他にも「自然保護」に向けて動き出していた人々がカリフォルニアの内外にいた。南シエラ山麓では、地元の『ヴァイザリア・デルタ (Visalia Delta)』紙のジョージ・スチュワート (George Stewart) が「森林保護」を求める論説を掲載し始めていた。彼は一八八一年にカリフォルニア州選出連邦上院議員を通して「南シエラ公立公園法案」提出に漕ぎ着けたものの、同法案は公有地

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

委員会において廃案となった。

サザン・パシフィック鉄道（The Southern Pacific Railroad）もまた「自然保護」に関わり始めていた。その中心的位置にいたのがウィリアム・H・ミルズである。彼はサクラメント『レコード・ユニオン』紙の共同所有者であると同時に編集者を務め、シエラ北部で展開された水力採掘反対運動において指導的役割を果たした。そして、一八八〇年にヨセミテ管理委員に、八三年にはサザン・パシフィックの主任地所管理人に就任した。ミルズ指揮下の「ヨセミテ委員会」は州の技術者の助力を得て、一八八二年に集水域保護のための境界線拡張を提案したが、これも実現しなかった¹⁷⁾。

一八六〇年代末から八〇年代にかけて認識は深化したが、「森林保護」運動は結実せずに終わり、ミューアとスチュワートは共に一八八〇年代の一時期シエラ山麓を離れて過ごすことになった¹⁸⁾。

この間、一八八〇年に後にゼネラル・グラント国立公園となる一角が公有地処分から外され、セコイア国立公園地域においても、一八八五年に共同土地・植民協会(Cooperative Land and Colonization Association、七七年に Kaweah Co-operative Commonwealth Company of California, Ltd. に改組・改称) が公有地の購入申請をした時、連邦

公有地管理局の査察官が土地集積目的のダムではないかと疑い、ジャイアント・セコイアの森があるタウンシップ一区画を公有地処分から撤回していた。

しかし、カウイア共同社会会社はセコイア生育地を除く申請地への植民を開始し(カウイア植民地)、一八八九年までにはジャイアント・フォレストに近づきつつあった¹⁹⁾。また、全体として見ても公有地処分はシエラ中・南部共で行し、ヨセミテ国立公園地域で約六万エーカー、セコイア国立公園地域で約三八八〇エーカーが個人の手に渡っていた。これらは国立公園設立後に管理上の難題を課すことになる(第三章)。

他方、東部では「自然保護」意識の高まりの中で、アラパチア山岳会(Appalachian Mountain Club)やセオドア・ローズヴェルトを中心とする大型猟獣「保全」団体、ブーン・アンド・クロケット・クラブ(The Boone and Crockett Club、以下「B & C」と略記)が結成されて活動を開始していた。また、一八八六年に騎兵隊のイエローストーン公園派遣が決定され、騎兵隊は同国立公園を「自然保護」区として整備していった。これらの動向はシエラ・ネヴァダの「自然保護」に影響を及ぼすことになる。

二、国立公園運動の展開、一八八九〜一八九一

一八八九年、ミューアとスチュワートがシエラ・ネヴァダの「自然保護」の最前線に復帰した時、膠着していた事態がにわかに動き出した。

ヨセミテ国立公園運動は一八八九年夏に『センチュリー (The Century Magazine)』誌の編集者ロバート・アンダーウッド・ジョンソン(Robert Underwood Johnson)がミューアとハイ・シエラでキャンプをし、ヨセミテ地域とキングズ・キャニオン地域の国立公園化運動推進を決定したときに始まった。後年のジョンソンの回顧によると、当初の意図は放牧によって荒廃したハイ・シエラの修復とヨセミテ溪谷の連邦返還にあった。

加えて、画家のチャールズ・ロビンソンがヨセミテ溪谷内のアトリエを荒らされたとして、「ヨセミテ委員会」を訴え、州議会が調査に乗り出していった。ロビンソンはミューアらに協力し、この二つの流れに「ヨセミテ委員会」に不満を抱いていたジョージ・マッケンジーが加わり、運動が展開した。²²⁾

そして一八九〇年三月十八日に、ウィリアム・ヴァンデヴァー連邦下院議員がヨセミテ国立公園法案を提出した。しかし、この法案の対象地域はヨセミテ溪谷周辺に限られ

ており、ミューアにとっては不十分なものであった。²³⁾

それ故、ミューアらは法案修正を試みた。その中で四月末にジョンソンはトウオルミー川流域の即時追加とキングズ・キャニオン地域の一旦棚上げを提案した。そして五月初頭、ミューアはジョンソンの要請に応じてトウオルミー地域の追加資料をワシントンに送付し、高地に関しては「ヨセミテの全水源」とトウオルミー草原を、低地に関しては「シエラの全基本樹種の標準木を含む森林一区画」を含む形で境界線の大幅な拡張を求めた。²⁴⁾

六月二日の連邦下院公有地委員会でジョンソンがミューア案を開陳したのを契機に修正案の起草に向かったが、ミューアらにとって三ヶ月半近く法案の行く末が不明瞭な状態が続いた。

この間、ミューアはアラスカ探検に出航し、ジョンソンは州立公園地域の連邦返還を狙って『センチュリー』誌の一八九〇年四月号に、ヨセミテ管理委員会を非難する論説とジョンソン自身とマッケンジーらによる投書を、²⁵⁾ 続いて八月号と九月号にミューア自身の二本の論稿、「ヨセミテの至宝」と「提案中のヨセミテ国立公園の特色」を掲載した。

ミューアは前者で、タイトル通りヨセミテ溪谷を描写すると同時に州によるヨセミテ溪谷の植生破壊を非難し、後者で知名度の低い山岳地域の野性的で崇高な風景を中心に

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九—一九一三（加藤）

対象地域を東部の読者に紹介し、牧羊業と製材業によるその危機を論じた。²⁶ また、二本合わせて計十九枚という豊富なイラストを交えて、視覚的にも訴える構成をとっていた。しかしミューアは、九〇年の春にはカリフォルニアの知識人との対話の中で、本心とは別に州立公園地域の連邦返還には慎重な姿勢を示すようになっていた。²⁷

ほぼ時を同じくして、南シエラ山麓でセコイア公園設立運動がG・スチュワートらによって始められ、一八九〇年九月二五日にB・ハリソン大統領の署名を得てセコイア公立公園法が成立した。これはジャイアント・セコイア保護を明確に謳っていたものの、森林「保護」の第一歩として、所有権の主張が提出されていない区画を慎重に選んで進められたために、当初の規模は小さかった。²⁸

ヨセミテ国立公園法案の代替法案である「カリフォルニア森林保留地法案」が本会議に報告される見通しがついたのは九月二〇日になってからであり、第五十一議会第一期の最終日前日の九月三〇日に事実上無審議で可決され、翌日大統領の署名を得て成立した。

ここで同法の内容に触れておこう。まず、注意すべきは、ヨセミテ国立公園法ではなく、ヨセミテ地域約一五〇〇平方マイルとグラントの森地域、及びにセコイア公園周辺を森林保留地指定した、「カリフォルニア森林保留地法」であっ

たことだ。また、その範囲内での「全林地、鉱物、自然の奇観と驚異の毀損からの保存、並びにそれらの自然状態の維持」「傍線部筆者」を行うための規則の制定、「野生動物と魚類の節度を越えた殺戮」と「商品もしくは利潤目的のそれらの捕獲ないしは殺戮」に対する予防手段を講じることを定めており、その限りにおいて、イエローストーン公園型の「自然保護」区を設立するものであったが、その法文中には「人民の利益と楽しむための公的公園もしくはプレジャー・グラウンド」と記されていない。加えて、同法がヨセミテ「州立公園」に影響を及ぼさないことが明記されていた。

問題は議員がどれだけ認識できていたかである。第一項中に一八六四年の「ヨセミテ州立公園」法への言及があることから、注意深い人物であれば、その隣接地域であることを認識できたかもしれない。但し、この時の議員の数少ない反応の中にはミューアの論稿との関連が明確なものはなく、セコイア／ゼネラル・グラント地区に関しては認識さえ不可能であったであろう。そして、セコイア公園拡張地域にカウイア植民地の申請地が含まれていたことから問題が発生することになる。²⁹

サザン・パシフィック鉄道の関与をめぐる問題に論点を移すと、近年の研究に拠れば、ヴァンデヴァー議員自身

がサザン・パシフィックの意を受けていたのに加えて、「カリフォルニア森林保留地法案」の起草にサザン・パシフィックの地所管理人、ダニエル・ザムワルトが関わっていた。

確かに、セントラル・パシフィック鉄道はシエラ・ネヴァアダ越えの際に森林の組織的な伐採を行っており、世紀転換期のサザン・パシフィックは太平洋岸地域における一大森林所有者であった。そして共に州議会に支配的影響力行使する「独占」企業として、カリフォルニア州民の怨恨を買っていた²⁹。が、一八七〇年代と八〇年代初等、カリフォルニア経済を反映し貨物・旅客輸送の業績は停滞しており、同社の重役達はカリフォルニア州の経済発展が会社の発展にとって不可欠であると見なしていた。その打開策として重視したのが不安定な鉱山業から多角的農業への産業構造の転換であった。即ち、水源林「保全」はその必要条件であり、そこに一八七〇年代以来の「自然保護」への関心が由来していた。より具体的に述べるとサン・ホアキン溪谷の開発にとつて水源にあたるシエラ・ネヴァアダ山脈の森林は必須であると考えられており、隣接地域の開発と一体になった「自然保護」であった。加えて、国立公園設立による旅行者の増加も見込んでいた³⁰。

さて、法案成立によってミューア達の希望の一端は実現したように見える。しかし、一八九〇年末までに地元で反

史苑（第六〇巻二号）

国立公園協会が結成されており、法律だけでは紙上の存在にとどまる可能性が極めて高かった。

そこで重要な意味を持ったのは、その後半年間の経過である。内務長官ジョン・ノーブルは各々をヨセミテ、セコイア、ゼネラル・グラント国立公園と命名し、ヨセミテ地域に派遣された査察官はノーブルに国立公園地域とヨセミテ溪谷の惨状を報告すると同時に、放牧対策として騎兵隊の派遣を要請した。そして、一八九一年二月十二日に内務長官ノーブルの要請を受けた陸軍省長官レッドフィールド・プロクターが、サン・フランシスコ近郊のプレシデーオに駐屯していた第四騎兵隊所属の二個中隊を国立公園管理にあててることを決定した³¹。

加えて、一八九一年三月三日に森林保留地条項を含む公有地法改正法案が成立し、一八九七年までにシエラ山脈にも国立公園を取り囲む形で森林保留地が設置された。

三、シエラ・クラブとヨセミテ国立公園

ジョンソンは当初、B&Cに相乗りする形で国立公園保護団体結成することを考え、一八九一年に調整を試みたが、一八九一年中にその動きは停止した。

他方、騎兵隊管理が二年目に入った一八九二年の五月、

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァアダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

カリフォルニア大学とスタンフォード大学の教員を中心とするサン・フランシスコ地域の市民の間で登山クラブを設立する動きが起り、同年六月四日に「太平洋岸の山地域を調査し、楽しみ、そして利用可能にすること。それらに関する信頼できる情報を出版すること。シエラ・ネヴァアダ

の森林とその他の自然の諸特色の保存に国民と政府の支持と協力を取り付けること」を結成主旨として、シエラ・クラブ (The Sierra Club) が結成された。同日、ミューアは初代会長に選出され、夏の終わりまでに一八二名が創立委員会に名を連ねた。

結成間もないシエラ・クラブには迅速な対応を迫られる課題があった。同年二月、第五十二議会にアンソニー・カミネティ連邦下院議員がヨセミテ面積削減法案を提出したのである。

この時期の代理監督官（騎兵隊の中隊指揮官）は、一八九一〜九三年に任務にあたったエイブラム・E・ウッド大尉と一八九四年に派遣されたジョージ・H・G・ゲイル大尉共に、公共性と管理の効率化の観点から「自然の奇観」を有さず、分水界保護にも問題を生じない鉾山地区の除外を進言していた。そして内務長官も境界線修正に肯定的であった。

シエラ・クラブは一八九三年二月に下院農業委員会委員

長に反対請願を打電し、当座を凌ぐことに成功した。翌九四年八月の第五十三議会に同議員が削減法案を再提出した際、下院公有地委員会はウッド大尉の報告に沿った境界線修正を進言したが、シエラ・クラブ側は州議会のカミネティ法案反対両院合同決議を取り付けて、阻止した。

一八九五年に代理監督官アレックス・ロジャーズ大尉が面積削減反対を表明して以降、代理監督官はその路線を踏襲するようになった。他方、ミューアは一八九七年から一九〇〇年にかけて『アトランティック・マンスリー (The Atlantic Monthly)』誌上に「ヨセミテ国立公園を中心に西部の「自然保護」関連の論稿を多数発表した。これらの論稿を再録した『私たちの国立公園 (Our National Parks)』は一九〇一年九月に出版され、同年中に約一八〇〇部を売り上げた。

この内の二本、「西部の野性的な公園と森林保留地」並びに「アメリカの森林」は一八九七年の森林保留地危機への対応であると論じられてきた。しかし管見の限り、ヨセミテに関する論稿の政治的含意の解釈はこれまでなされてこなかった。

ヨセミテ関連の論稿は、同公園の概要、森林、動物、鳥、水源と河川、野生の庭園からなり、ミューアは「低標高地域は、平均標高約五〇〇〇フィートで、世界中のあらゆる

松の中で最も大きくかつ美しい、サトウマツからなる、大森林地域である」と論じてその魅力を訴えると同時に、ミューリジカの越冬地としての低標高地域の重要性とインディアンのシカ狩りについて論じた。

これらの論稿を解釈するうえで重要なのが、ヨセミテ国立公園の境界線修正問題である。前述の如く、シエラ・クラブは当初の危機を阻止したものの、境界線修正法案は一八九八年以降再び毎年のように提出され続けていた。

ヨセミテ公園の危機との繋がりを示す直接的な証拠はない。しかし、一八九〇年の論稿には西部森林地帯Ⅱ低標高地域に触れた箇所は無く、一八九〇年春の私信と九二年のシエラ・クラブの請願にも、西部森林地帯の野生動物にとつての重要性は論じられていない。加えて、これ以後にも同様のエッセーを発表していないことから、無関係であったとは考え難い。

『私たちの国立公園』は一九〇四年の上半期の段階でも「大きくはないが、前の半年から落ち込みは見せていず、素晴らしい生命力を示して」いた。

しかし、事態はミューアらにとつて悪化し、連邦議会は一九〇四年末にヨセミテ国立公園の削減対象地域を決定するためにヨセミテ公園委員会を設置した。ミューアは『私たちの国立公園』を同委員会委員長のハイラム・チッテン

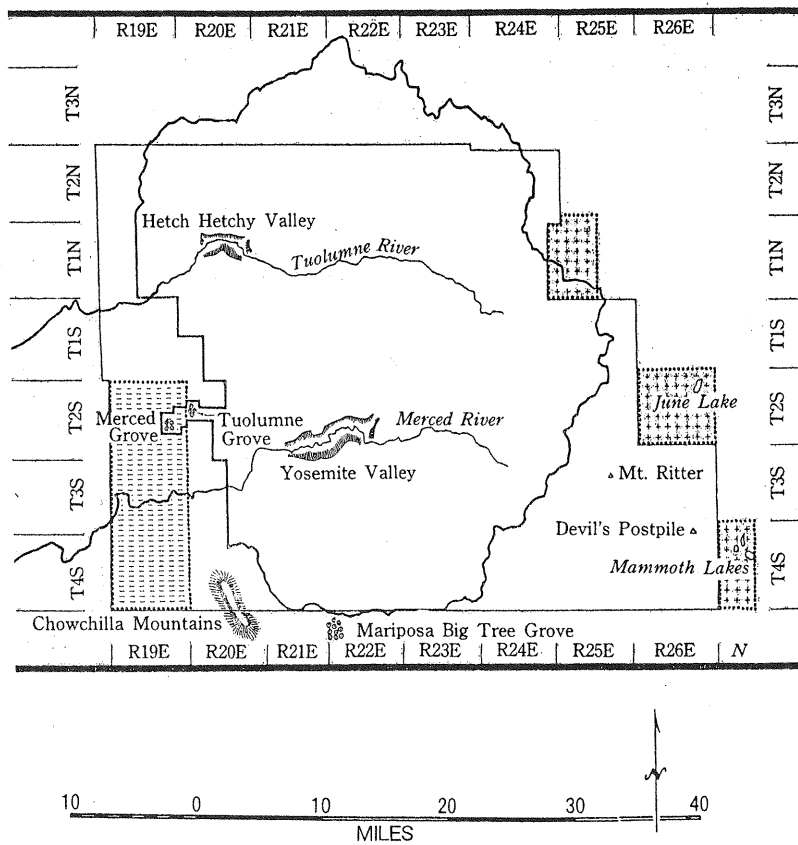
ダン工兵大尉に寄贈し、シエラ・クラブの首脳陣は意見書を提出し、西部森林地帯に関して譲歩しながらも東部に七二平方マイル追加することを求めた。

しかし、一九〇四年末に内務長官ヒッチコックが連邦議会に委員会報告を提出し、同報告に基づく境界線修正法案は翌一九〇五年一月末に可決され、二月七日にローズベルト大統領の署名を得て成立した。それによって、西部の商業的価値のある森林大部分と南西部の鉱山地帯を中心とする五四二・八八平方マイルのシエラ森林保留地への編入と、北部山岳地帯一三三平方マイルの国立公園への付加が決まった(地図参照)。削減推進派議員の論拠は、対象地域は「風景上の目的にとつて何の価値もない」ことであり、ミューアの議論を援用して反論する議員は一人もいなかった。

そして森林保留地の農務省移管がその六日前に決定していたことから、同地域は「保全」原則に則り管理されることになり、早くも同年九月にヨセミテ溪谷鉄道の建設が開始された。

ところで、ヨセミテ溪谷管理の問題もまた一九〇五年に州議会が連邦政府への返還を決定し、翌年に連邦議会が受諾するまで熾り続けた。

この間、シエラ・クラブ側は一八九七年に一度失敗した後、T・ローズヴェルト大統領の支持とサザン・パシフィック



ジョン・ミュアとシエラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

地図 シエラ・クラブ 1904 年ヨセミテ国立公園境界線修正案、並びに
1905 年法による境界線

出所 Holway R. Jones, *John Muir and the Sierra Club: The Battle for Yosemite*
(San Francisco, 1965), p. 190.



1890 年 10 月 1 日法による境界線

公園からの削除提案地域 (シエラ・クラブ案)

公園への付加提案地域 (")

1905 年 2 月 7 日法による境界線

クの社主エドワード・ハリマンの協力を取り付けた。そして、一九〇五年に州議会の返還法案を起草したのはシエラ・クラブのウィリアム・コルビーとW・H・ミルズの二人であり、ここにもシエラ・クラブとサザン・パシフィックの協力体制が現れていた。⁴³⁾

ただし、サザン・パシフィックの関連会社による鉄道建設提案が一部受け入れられ、南西部境界地域十六平方マイルが新たに削減された。サザン・パシフィックの利害は旅行者増にあり、ミューアらの希望と全面的に一致してはいなかった。⁴⁴⁾

しかも、これらの境界線修正によって公園内私有地が一扫されたわけではなく、一九一〇年代前半に再度問題が発生することになる(第四章)。

何よりもミューアらの「勝利」は東の間のものであった。一九〇一年に成立していたカリフォルニア通行権法に基づき、一九〇七年にサン・フランシスコ市が内諾を取り付け、たうえでダム建設申請を再提出したことで、ヘッチヘッチー論争が胎動したからだ。同法は内務長官に公益性を判断基準として決定権を付与しており、ガーフィールド内務長官は一九〇八年にヘッチヘッチー・ダム及びエレノア湖ダム建設許可を発行した。そして「公益性」は同論争における焦点となった。結果は周知の如くミューア達、反対派の

敗北であった。

他方で、問題視されずに建設が許可された事例もあった。カリフォルニア通行権法に基づき、ホイットニー山電力会社がセコイア公園内の周辺地域への水力発電施設建設を申請した時、一九〇七年二月に内務長官ヒッチコックは当該地域が旅行者にはほぼ利用不可能である判断して建設を許可した。同発電所はヘッチヘッチー論争が佳境を迎えた一九一三年五月には稼動を始めていた。⁴⁵⁾

当初、シエラ・クラブの関心はヨセミテ国立公園に傾倒していたが、セコイア公園もまた難題を抱えていた。カウイアー植民地問題が未解決だったのである。一八九一〜九二年にセコイア／ゼネラル・グラント国立公園に派遣されたドースト大尉は、内務長官からの指示が到着するまで現場で強硬な態度を示した。騎兵隊と植民地側はかなり険悪な関係に陥った。入植者達が先行きに不安を憶え、同植民地は翌年までに解体に向かった。⁴⁶⁾

四、騎兵隊による「自然保護」とその限界

当初、騎兵隊の中隊指揮官とミューア達の間意見の相違があった。しかし、歴代の代理監督官は独自の視点から「自然保護」を実行していた。ヨセミテ、セコイア両公園の

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

現場に入った騎兵隊が真っ先に直面したのが数万頭に及ぶ放牧家畜の群れであり、彼らはその排除と防火に努めることになった。この二つは当時の「自然保護」主義者の間で同一視され、重要視されていた問題であり、この点においてはミューアらと見解が一致していた。⁴⁷

ただし、彼らは機械的に鎮火に努めたわけではなかった。ヨセミテでは、ウッド大尉自身を含めたほとんどの者が火災の徹底鎮火に肯定的であったが、一九一三年までの代理監督官全十五人中、四人が疑義を呈した。この内、一八九四年のゲイル大尉は懐疑を表明するに留まっていたが、一八九八年に派遣された文民の査察官J・W・ジェヴェリーと一九〇三年の代理監督官J・ギャラード中佐は毎秋に森林を体系的に燃やす「昔のインディアンの慣習への復帰」を勧告し、一九〇四年のジョン・ビジロー・ジュニア退役大尉は慎重姿勢を示しつつも、「その一部分にとつては良好で安全かもしれない」と論じて独自に「軽火災(light burning)」、⁴⁸「軽い地表火でリターを除去することで大火を防ぐという防火法」⁴⁹を実施していた。

セコイア/ゼネラル・グラント公園でも、二〇世紀初頭に林床からのリターの除去や防火帯の設置に加えて「軽火災」が実施された。が、内務省は「軽火災」を採用せず、一九〇五年以降徹底鎮火主義がルーティン化した。⁴⁹

ところで、騎兵隊による放牧家畜の排除には野鳥保護という視点が加わっていた。初代監督官ウッド大尉は、猟鳥の巢が羊に踏みつぶされて幼鳥が殺されている状況への憂慮を表明した。騎兵隊は羊飼いと群れを分離して境界外に排除するという方法を用いて放牧家畜の排除にあたり、⁵⁰四年にゲイル大尉は回復傾向にあることを報告した。

野生動物（鳥類・哺乳類）保護に大きな一歩を踏み出したのはS・B・M・ヤング中佐で、彼は一八九六年に公園内への銃器類の持ち込みを厳禁とし同年中に二〇〇丁を越す銃器類を押収した。そして年次報告において「彼らの人間に対する本能的な恐怖は数年の内に徐々に大いに和らげられて旅行者は自然な状態で彼らを見て学ぶことができるようになるであろう」と述べた。⁵¹

翌一八九七年には、アレックス・ロジャーズ大尉は、その延長線上で内務長官にネヴァダから訪れるインディアンによる晩秋の狩りを防止する手段を講ずるよう要請した。⁵²ただし、多雪地帯であるハイ・シエラの国立公園においては、夏季の狩猟規制だけでは不十分であった。セコイア公園のドースト大尉は早くも一八九二年の年次報告において、ミュールジカ保護の観点から境界線の山麓部への拡張を要請し、その後の代理監督官も繰り返し要請した。ヨセミテでもウッド大尉が冬季に低地へ移動することを述べていた

が、一九〇三年にギヤラード中佐が、西部森林地帯がミュールジカにとつて越冬地として重要であり、その季節にハンターの餌食になると明確に指摘するまで、この問題に関する認識は進まなかった。翌一九〇四年、J・ビジロー・ジュニア退役大尉は、越冬地としての重要性を境界線修正に対する反対意見の論拠として提示した。

しかしヨセミテ、セコイア共にミュールジカの季節移動の問題は連邦議会での論点にはならず、セコイア公園拡張は棚上げされ続け、ヨセミテ国立公園西部は削減された。厳密な定量的調査が行われていたわけではないが、一九〇八年にヨセミテのハリー・ベンソン少佐は野生動物の減少を報告した。彼はその理由として面積削減と鉄道建設による利便性の増加に加えて、野生動物が人馴れし始めていたことを挙げている。最後の点に関して、その観察が正鵠を射ているとすれば、ヤング中佐の希望的観測が裏目に出たことになる。

法律は猟獣 (game) ではなく魚類と野生動物 (fish and wildlife) の保護を謳っていたものの、「自然状態の維持」を求めてはいず、代理監督官にもその意識はなかった。それ故に捕食者はミュールジカとは異なった運命を辿り、殺戮とは逆方向の動物相改変も試みられた。

前述のゲイル大尉は捕食者を放牧排除の有益な助手と述

べており、ムーアの「アンクル・サムの兵士達に次いで、クマは最も効果的な森の警官である」という見解と一脈通じるところを示していたが、セコイア公園では一九〇三年にミュールジカ保護がコヨーテとマウンテン・ライオンの撲滅許可申請に転じ、翌年に実施された。ヨセミテ国立公園でもヨセミテ溪谷返還後、コンセツショナーの要望に対応する中で、徐々にクロクマの溪谷内からの排除やコヨーテの毒殺を実施するようになった。

他方で、一八九〇年代初頭以降、魚類の生息していなかったハイ・シエラの河川への非自生種を含めた鱒の稚魚の放流を継続的に実施した。また、実現しなかったものの、一九一一年にセコイア公園の代理監督官はイエローストーンからのバイソン移入を要望していた。

加えて、一九一〇年代にヨセミテ国立公園はダム建設と製材業への「開放」という、騎兵隊によっては解決され得ない問題に直面した。前者に該当するヘッチャヘッチャ論争は有名であるが、ダム建設申請と許可には先例があった。一八九六年に灌漑用ダム建設計画が持ち上がったことがあった時、内務長官から打診を受けたヤング中佐とロジャーズ大尉が調査し、反対したために実現しなかった。しかし一九〇一年に成立したカリフォルニア通行権法によって、この問題は代理監督官の手を離れ、ダム建設への道が開かれ

ジョン・ミューアとシエラ・ネヴァアダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三（加藤）

た。

そして、製材業者への対応もまた連邦議会の決するところであり、その部分的開放はヘッチヘッチ問題とは対照的に静かに進行した。その原因は「カリフォルニアの中で最も素晴らしいサトウマツの樹林のいくつかが」公園内私有地として存在し、一九一一年までに境界線近くまで伐採の手が伸びていたこと⁶⁵にあった。

この事態に対する対応として連邦議会が講じたのが「土地と林地交換」法であり、一九一二年と一四年に極めて静かに成立した。この法律は「風景美を、常に、維持すること」を目的として、景勝地区の道路沿いにある私有林と旅行者の目に付かない場所の森林を等価交換し、政府の定められた規制の下での伐採を定めた⁶⁶。

この間の事情は『シエラ・クラブ・ブレティン (Sierra Club Bulletin)』を通して同クラブの会員にも知らされた。首脳部は一抹の不安を表明しつつ賛意を表明していたのだが⁶⁷、結果は不安の中であつた。

騎兵隊は様々なことを試みたが、その活動には限界があつた。先ず、当初、正確な地勢図が存在していなかったために、騎兵隊員は手探りで活動しながら地図を製作することを強いられた⁶⁸。また、セコイア／ゼネラル・グラント国立公園には、一九〇〇年まで議会が全く予算支出をしなかつ

たため、公園としての整備が遅れていた。加えて、代理監督官が繰り返し購入を勧告し、時にはオプシヨンの獲得まで行つたにもかかわらず公園内私有地も放置され続けた⁶⁹。そして、監視期間が春から秋に限定され続けたため、密猟の取り締まりにも限界があつた。この季節の限定性は移牧の時期に対応したものであつたが、放牧の完全排除も不可能であつた。何故なら、一部の牧場主は連邦政府と妥協して放牧を継続し、騎兵隊相手に訴訟を起こし勝訴した者もいたからである。

ハーヴェイ・メイアソンは第四騎兵隊（一八九八年まで任務に当たり、二〇世紀初頭にもその出身者が代理監督官の任務に当たつた）を「陸軍の忘れられた環境主義者」と呼び高く評価している。メイアソンによれば、騎兵隊が「自然保護」における優れた役割を果たし得たのは、ウエスト・ポイント士官学校の自然科学や数学に重点を置いた教育と、一八七〇年代と八〇年代に第四騎兵隊の指揮官であつたラナルド・マッケンジーの指導力の影響が大きいという⁷⁰。

おわりに

シエラ・ネヴァアダの国立公園はミューアのような「自然

保護」主義者の理念だけで実現したのではなく、その存立には鉄道会社の「啓蒙された利己主義」の支持が不可欠であった。しかし、両者の利害が常に全面一致していたわけではなく、諸種開発利害の圧力と合わさって生態学的に不利な状況をもたらすこともあった。その中でミューアの全体性を指向した議論が反映されることはなく、議会の認識はモニュメンタリズムの範囲に留まっていた。

そのような不十分な状況を現場で支えたのが、合衆国陸軍騎兵隊であった。ヨセミテの境界線修正問題等における不一致も見られたものの、ほとんどの場面において、ミューアらと見解が一致していた。

ところで、ヨセミテとその周辺地域（原型の境界線内）において、一九一六年後半から二六年前半までに計四億ポンド（九〇万立方メートル）を上回る樹木が伐採され、二〇年代末までに覆い隠せない状況に陥っていた。ミューアの予測が的中したと言えよう。

しかし、最大の問題は先住民の當為と「自然」自体の性質を考慮に入れたときに現れることになった。

彼らの狩りが禁止されたことは先に述べたが、出入り自体が禁止されたわけではなかった。ヨセミテ渓谷では国立公園化後も居住や季節的利用を続け、旅行者相手に手編みの籠を販売し、伝統的食材である堅果の採集を行っていた。

史苑（第六〇巻二号）

騎兵隊による先住民排除は徹底したものではなかったが、「生態系」にとつての効果は大きなものがあつた。

ミウオクによる狩りは相応の注意深さを伴った罾猟や、季節移動のルートを知りた上での待ち伏せによるものであり、野生動物との間の緊張関係が存在していた。

加えて、ヨセミテ渓谷では一八六六年のヨセミテ州立公園受諾法以前、アワネチの火入れによって萌芽更新をするオーク類や草原からなる開放的な景觀が、シエラ山中の森林帯では徹底鎮火政策以前、落雷と先住民の「火入れ」による地表火が数年に一度の高頻度で発生することで、陽樹を主体とする開放的な森林が維持されていた。

ミューアはセコイアの更新における火災の持つ重要性（実生が定着する必要条件を提供すること）を認識し、一九一二年の『ヨセミテ』に至るまで論じ続けていたが、と同時に騎兵隊による森林火災の鎮火を賞賛していた。彼もまた一九世紀後半から世紀転換期の風景賛美的価値観を共有していた。ミューアの死後も美しい（「崇高な」）風景を重視する公衆の視点に変わりはなく、国立公園局は徹底鎮火政策を一層推し進めた。その結果、一九六〇年代までに森林植生の構成は変化を余儀なくされ、野生動物も影響を受けることになった。

即ち、この時期に行われた「自然保護」はその後の継続・

ジョン・シユニアとシユアラ・ネヴァダ山脈における国立公園の形成、一八八九〜一九一三(加藤)

強化を通して、当初の「修復」という意図を超えて、人間と動植物の関係を根底から刷新し、景観を再構築する性格を有していたのである。

註

- (1) Samuel Hays, *Conservation and the Gospel of Efficiency: The Progressive Conservation Movement, 1890-1920*(Cambridge, 1959); Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind*, 3d. ed. (New Haven, 1983).
- (2) 「保全」と「保存」の哲学的定義と思想的議論については、ジョン・P・スミア 間瀬啓充訳『人間の自然に対する責任』(岩波書店、一九七九年)。ただし、筆者は「保存」と「保全」の二者択一型議論の歴史への無批判的投影に疑念を感じてゐる故、両者を一括して「自然保護」と表記する。
- (3) 『ローマに関する最近の書誌学』(Thurman Wilkins, *John Muir: Apostle of Nature*(Norman, 1995), pp. 275-83. 日本人による研究・伝記として次の二本を挙げておく。
- 岡田泰男「ターナーとシユニア」『アメリカ研究』二二二号(一九八九年)。加藤則芳「森の聖者―自然保護の父 ジョン・シユニア」(山と溪谷社、一九九五年)。
- 古典的な年代記の一例として、ヨセミテ国立公園地域の歴史書を一冊挙げておく。Carl P. Russell, *One Hundred Years in Yosemite: The Romantic Story of Early Human Affairs in the Central Sierra Nevada* (Stanford University, 1931); 国立公園史研究の初期の例外として、左

- 記の研究書がある。H. Daun Hampton, *How the U. S. Cavalry Saved Our National Parks*(Bloomington, 1971).
- (4) Alfred Runte, *National Parks: The American Experience*, (Lincoln, 1979); *Ibid.*, 3d ed. (Lincoln, 1997).
- (5) 本稿に直接関係するものを中心に数本挙げておく。
- Alfred Runte, *Yosemite: The Embattled Wilderness* (Lincoln, 1990); Thomas R. Vale and Geraldine Vale, *Time and the Tuolumne Landscape: Continuity and Change in the Yosemite High Country* (Salt Lake City, 1994); Lary M. Dilsaver and William C. Tweed, *Challenge of the Big Trees: A Resource History of Sequoia and Kings Canyon National Parks* (Three Rivers, 1990); Richard West Sellars, *Preserving Nature in the National Parks: A History* (New Haven, 1997); James A. Pritchard, *Preserving Yellowstone's Natural Conditions: Science and Perceptions of Nature*(Lincoln, 1999).
- (6) Harvey Meyerson, "The Army's Forgotten Environmentalists: Soldiers and Yisemite, 1891-1898," Unpublished Dissertation, Brandies University, 1997; Mark David Spence, *Dispossessing the Wilderness: Indian Removal and the Making of the National Parks* (New York, 1999); Alfred Runte, *Trains of Discovery: Western Railroads and National Parks*, 4th ed. (Boulder, 1998).
- (7) Francis P. Farquhar, *History of the Sierra Nevada* (Berkeley, 1965), pp. 71-91.

- (80) *Congressional Globe*, 38th Cong. 1st sess. (May 17, 1864), pp. 2300-01; Runte, *National Parks*, pp. 19-31, 48-50.
- (81) Peter J. Blodjet, "Visiting the Realm of Wonder": Yosemite and the Business of Tourism, 1865-1916," Richard J. Orsi, Alfred Runte, and Marlene Smith-Baranzini (ed.), *Yosemite and Sequoia: A Century of California National Parks* (Berkeley, 1993), pp. 36-40; Runte, *op. cit.*, pp. 29-32.
- (82) Craig D. Bates & Martha J. Lee, *Tradition and Innovation: A Basket History of the Indians of the Yosemite-Mono Lake Area* (Yosemite National Park, 1991).
- (83) Wilkins, *op. cit.*, pp. 81-125.
- (84) Robert Engberg (ed.), *John Muir Summering in the Sierra* (Madison, 1984), pp. 68-73, 102, 128.
- (85) John Muir, "God's First Temples: How Shall We Preserve Our Forests?", *Sacramento Daily Union*, February 5, 1876, reprinted in William Cronon (ed.), *Nature Writings* (New York, 1997), pp. 629-33.
- (86) 1916年出版された伝記研究に於いて、ムアールが「エコーストーン公園」を知った時期に関する情報はない。
- (87) Paul Schullery, *Searching for Yellowstone: Ecology and Wonder in the Last Wilderness* (New York, 1998), pp. 68-88.
- (88) Farquhar, *op. cit.*, pp. 190-91.
- (89) Richard J. Orsi, "The Octopus Reconsidered: The Southern Pacific and Agricultural Modernization in

史苑 (第六〇巻二号)

- California, 1865-1915," *California Historical Quarterly* 54 (Fall, 1975), pp. 196-220; Runte, *Yosemite*, pp. 41-52; Dilaver and Tweed, *op. cit.*, pp. 62-4.
- (89) ムアールは商業的農業を精力的に営み富裕な農場主になつた。この利益が後の「自然保護」運動の資金となる。
- (90) Strong, "Sequoia National Park," pp. 75-84. 尚「ヤンキー・シークン」は1870年代にその存在が認められ、パロウエットの森として知られる。
- (91) Strong, "Sequoia National Park," pp. 89-90; Runte, *op. cit.*, pp. 49-50.
- (92) H. Duane Hampton, "The Army and the National Parks," *Forest History* 10 (October 1966), pp. 2-17.
- (93) 最終的に委員会側の無罪が確定した。W・H・メアヤソンは「モナーク委員会」を辞任した。
- (94) Meyerson, "Forgotten Environmentalists", pp. 175-83.
- (95) Robert Underwood Johnson, letter to John Muir, April 29, 1890, John Muir Papers (シエラ・クラブ館蔵); John Muir, letter to R. U. Johnson, June 9, 1890, "The Creation of Yosemite National Park," *Sierra Club Bulletin* [シエラ・クラブ誌] 29 (October 1944), pp. 58-9. この中でムアールは「エコーストーン」に述べた。「低地の境界に關しては、溪谷より下流のセローエラの森を含むように拡張され、シエラの全基本樹種の標準木を含む森林一區画を政府の保護におくべきだと願います。そして、その保護のため、我々がなされた、その森は雪のように消えてしまつてしまふ。」
- (96) Runte, *Yosemite*, pp. 55-56; "The Care of the

シムン・ワトソン・ヘン・ネンマ山脈における国立公園の形成 一八八九〜一九一三 (加藤)

Yosemite Valley, " *The Century Magazine* [シキ Century Magazine] 39 (April 1890), pp. 474-75; George G. Mackenzie et al, "Destructive Tendency in the Yosemite Valley," *Ibid.*, pp. 475-78.

(29) John Muir, "The Treasure of the Yosemite," *Ibid.* 40 (August 1890), pp. 483-500; Muir, "Features of the Proposed Yosemite National Park," *Ibid.* 40 (September 1890), pp. 656-67; R. U. Johnson, letter to John Muir, May 14, 1890, *JMP*.

(30) Muir, letter to R. U. Johnson, March 4 & June 9, 1890, "The Creation of Yosemite National Park," *SCB* 29, pp. 51-54, 58-59.

(31) Disaver and Tweed, *op. cit.*, pp. 66-69; *U. S. Statutes at Large* 26 (1890), p. 478.

(32) *Congressional Record*, 51st Cong., 1st session (September 30, 1890), pp. 10751-52; *U. S. Statutes at Large* 26 (1890), pp. 650-51.

(33) Michael Williams, *Americans and their Forests: A Historical Geography* (Cambridge, 1989), pp. 311-13.

(34) William Deyereil, *Railroad Crossing: Californians and Railroad, 1850-1910* (Berkeley, 1994). 尚一九〇〇年まで両鉄道は共に「ビッグ・フォア」の支配下にあつたが、一九〇〇年にサザン・パシフィックの経営上の支配権はエドワード・ハリマンに移行した。

(35) Richard J. Orsi, "Wilderness Saint' and 'Robber Baron': The Aomalous Partnership of John Muir and the Southern Pacific Company for Preservation of

Yosemite National Park," *The Pacific Historian* 29 (1985), pp. 147-48.

(36) Meyerson, "Forgotten Environmentalists," pp. 152-54, 177-87.

(37) John Muir, letter to Henry Senger, May 10, 1892; Holway R. Jones, *John Muir and the Sierra Club: Battle for Yosemite* (San Fransisco, 1965), pp. 7-9.

(38) *Ibid.*, pp. 11-5; Runte, *Yosemite*, pp. 68-70; "Proceeding of the Sierra Club," *SCB* 1, 1 (January 1893), pp. 23-24.

(39) John Muir, *Our National Parks* (Boston, 1901).

(40) Frederick Turner, *Rediscovering America: John Muir in His Time and Ours* (New York, 1985), pp. 307-13.

(41) Muir, *op. cit.*, pp. 80, 188-93. 「インディアンたちが秋の大規模な狩りをし始めるのはシカが降りて来たらとこつとるときである……この計画にはまたシカを群れで見つけるといふ利点がある。古く銃が修繕され、弾丸が製造され、猟師は、彼らが言うには、幸運を確保するために、体を洗ひある程度絶食する……中心となるキャンプがよく知られたシカの通り道に設置されて、そこはすぐに血で赤く染まる。……しかしインディアンはあらゆる所と同様どこでも消え去りつつあり、山地上の彼ら血に染まったキャンプは毎年数が減少している。この文章を騎兵隊の動向を重ね合わせて読むと極めて興味深い。銃器類の使用とインディアの情報源に関しては未確認である。」

Cf. Muir, "Among the Animals of Yosemite,"

- The Atlantic Monthly* 82 (November 1898), pp. 617-31.
 后里 氏 p. 624.
- (85) W. B. Parker, letter to John Muir, August 31, 1904, *JMP*; Stephen Fox, *American Conservation Movement: John Muir and His Legacy* (Boston, 1981), p. 117.
- (86) Runte, *Yosemite*, pp. 68-70; John Muir, J. N. Le Conte, and Wm. E. Colby, "Action of the Sierra Club on the Proposed Change of Boundaries of the Yosemite National Park," August 23, 1904, in *SCB*, 5 (January 1905), pp. 240-41.
- (87) *Congressional Record*, 58th Cong., 3d sess. (December 19, 1904), pp. 406-7; *Ibid.* (January 14, 1905), p. 889; *Ibid.* (January 26, 1905), p. 1384.
- (88) Runte, *Trains of Discovery*, pp. 49-61.
- (89) William Dudley, "Forestry Notes," *SCB*, 5 (January 1905), pp. 268-9.
- (90) Jones, *op. cit.*, pp. 64-65.
- (91) *Report of the Acting Superintendent of the Sequoia and General Grant National Parks* [「シユア・S & G Superintendent Report」の譯記], 1908, p. 458; Disaver and Tweed, *op. cit.*, pp. 95-96.
- (92) *Ibid.*, pp. 73-83, 113.
- (93) Thomas Magee, "The Preservation of Our Forest," *The Overland Monthly*, 2d series 19 (June, 1892), pp. 658-61; John Muir etc. al., "A Plan to Save the Forests: Forest Preservation by Military Control," *Century* 59 (February 1895), pp. 630-31.
- (94) *Report of the Acting Superintendent of the Yosemite National Park*, 1894 [「Yosemite Superintendent Report」の譯記], pp. 675-76; *Ibid.*, 1903, p. 522; *Ibid.*, 1904, p. 394; *Ibid.*, 1905, pp. 696-97.
- (95) Meyerson, "Forgotten Environmentalists," p. 218; John L. Vankat, "Fire and Man in Sequoia National Park," *Annals of the Association of American Geographers* 67 (March 1977), pp. 19-22; Runte, *Yosemite*, pp. 62-64.
- 尚この内務省決定の背後には、ロースヴェルト政権が推進しようとした森林保留地の農務省移管が影響を及ぼした可能性が高い。農務省林務局長官の「資源保全」政策におけるロースヴェルトの手腕であったギンオー・ジョンソンは徹底鎮火推進派であり、国立公園の現場にも回調を求めたのではないかと推測される。
- (96) *Yosemite Acting Superintendent Report*, 1891, p. 664; *Ibid.*, 1894, p. 675.
- (97) *Yosemite Superintendent Report*, 1896, p. 740; Meyerson, "Forgotten Environmentalists," pp. 345-48.
- (98) *Yosemite Superintendent Report*, 1897, p. 808; トーマン・スピーンスの報告は効果があつたと思われる。
- (99) Spence, *op. cit.*, pp. 110-11.
- (100) S & G Superintendent Report, 1891, p. 671.
- (101) Runte, *op. cit.*, pp. 62, 67-70, 78-80.
- (102) *Yosemite Superintendent Report*, 1894, p. 675; Muir, "Among the Animals of Yosemite," p. 622.
- (103) S & G Superintendent Report, 1903, p. 545;

シモン・シエローとシエロー・ネヴァダ山脈における国立公園の形成 一八八九〜一九二三(加藤)

- Ibid.*, 1904, p. 413; *Yosemite Superintendent Report*, 1911, p. 586.
- (75) *Yosemite Superintendent Report*, 1911, p. 651.
- (85) Kendrick A. Clements, "Politics and the Park: San Francisco's Fight for Hetch Hetchy," *Pacific Historical Review* 48(May 1979), pp. 185-215.
- (65) Meyerson, "Forgotten Environmentalists," pp. 339-40.
- (69) *Yosemite Superintendent Report*, 1911, p. 587, 594; *Ibid.*, 1912, pp. 660-61.
- (15) *Congressional Record*, 62d Cong., 2d sess. (April 2, 1912), p. 4198; *Ibid.*, 64th Cong., 1st sess. (July 1, 1916), p. 10363; *Statutes at Large* 37(1912), pp. 80-81; *Ibid.* 38 (1914), p. 345.
- (29) "National Parks," *SCB* 8(January 1912), p. 223; *Ibid.* 8(June 1912), pp. 285-86, 288-89; *Ibid.* 9(January 1913), p. 62.
- (33) Meyerson, "Forgotten Environmentalists," pp. 203-4.
- (13) Strong, "Sequoia National Park," pp. 166-92; *S & G Superintendent Report*, 1899, pp. 514-15.
- (59) Meyerson, "Forgotten Environmentalists," pp. 33-80.
- (99) Willard G. Van Name, *Vanishing Forest Reserves* (Boston, 1929), pp. 120-1; "シエローの予測に関する記事"註一八を参照せよ。尚、一九二九年に漸くシモン・D・ロッシンヒラー・シエローの資金援助を得て連邦議会が動き、翌三〇年に西部境界線付近の私有林が購入された。
- (79) S. A. Barrett and E. W. Gifford, *Mauok Material Culture: Indian Life of the Yosemite Region* (Milwaukee, 1933), pp. 140, 178-87; Bruce Kilgore and Dan Taylor, "Fire History of a Sequoia-Mixed Conifer Forest," *Ecology* 60(February 1979), pp. 129-42; 一八六六年の火災に關しては Hank Johnston, *The Yosemite Grant, 1864-1906* (Yosemite National Park, 1995), pp. 256-57.
- (89) John Muir, "The New Sequoia Forest of California," *Harper's New Monthly Magazine* 57 (November 1878), pp. 813-27; Muir, *The Mountains of California* (New York, 1894; reprint, New York, 1985), pp. 135-36; Muir, *The Yosemite* (New York, 1912), pp. 139-40.
- (39) Bruce Kilgore, "Restoring Fire to the Sequoias," *National Parks and Conservation Magazine* 44(October 1970), pp. 16-22.
- (70) このより長期の視点に關するより詳細な情報に關しては、現在別項を準備中である。

[慶應義塾大学経済学部助手(嘱託)]